脳研究所の今後

新潟大学脳研究所長　那波宏之

新潟大学は、古くは昭和の初期より「ヒトの脳」に強い関心を抱き、「新潟神経学研究会」を発足させておりました。その先見性が認められ、戦後、昭和31年に中田瑞穂先生らのご尽力により「新潟大学脳研究室」が設立され、昭和42年(1967年)にはわが国で最初の脳に関する国立大学附置研究所として改組・開設されたという伝統を持っています。この間一貫して、「基礎と臨床の一体化を志す」という研究理念に基づき、当初から臨床2科(脳神経外科・神経内科)をコアとして、ヒトの脳疾患の原因、病理、診断学、治療法を研究してきたという実績をもっております。

平成14年には、文部科学省中核的研究拠点(COE)の一つとして最先端脳機能画像法とその応用を研究する統合脳機能研究センターが設置され、次いで世界有数の脳疾患標本を保有する神経病理学分野が21世紀COEの認定を受け、当該プロジェクトを実施しました。さらに平成22年に脳研究所は「脳神経病理標本資源活用の先端的共同研究拠点」の全国共同利用研究施設となり、全国のべ300機関と脳疾患病理・疾患モデル動物・遺伝子解析にかかる共同研究を展開しました。平成27年にはその成果により、拠点としての認定更新が承認され、平成28年春からは「脳神経病理資源活用の疾患病態共同研究拠点」として本邦ならびに海外にむけて脳疾患の共同研究の世界展開を企てることになりました。

現在、少子高齢化、グローバル化、医療地域格差といった多くの課題を抱えています本邦において、脳研究所の責務は非常に重いものがあると考えます。近年、目を見張る発展を遂げている先端医療・先制医療の躍進は、癌や心臓病を、もはや克服しようとしています。逆に皮肉にもアルツハイマー病やパーキンソン病などの神経難病は、ますます患者数が増してゆき、深刻な社会問題を引き起こす結果になってしまいました。その意味で、「脳疾患の克服」をスローガンとするこの脳研究所に「待った」はありません。もう一度、脳研究所の設立理念に立ち帰り、ヒト脳とその病気に向き合い、苦しんでいる患者さんやそのご家族に治療法を一刻も早く提供する責任があります。

今後、その目標・理念に向け脳研究所は自らを切磋琢磨し、大学の先頭に立って更なる機能強化、自己改革を図らねばなりません。知材の継承はもとより、国際化、若手研究者の育成、世代交代、医学部・病院との連携、さらに研究部門の再編成も必要になるかもしれません。引き続き厳しい財政環境が想定されますが、脳研究所は競争的外部資金の獲得などに最大限の自助努力を行いつつ「ヒトの脳の理解」「脳疾患を克服」に向けて今後も、研究力強化、自己改革、ならびに医療貢献を実践して参りますので、変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げる次第です。

Message from the Director